

石材を用いた製品開発による地域産業振興

石匠の見世蔵 2012

西尾浩一* ・ 五十嵐浩也**

Regional Industry Promotion by Development of Stone Products.

ISHIKUNOMISEGURA2012

Koichi NISHIO*, Hiroya IGARASHI**

The purpose of this study is to promote local industry by the development of stones products. Stones industry that is traditional in the region is on the verge of serious crisis with increasing imported stones. We have been working on the development of new stone products produced with students. The produce of the building stones products had been performed by students and of University of Tsukuba. In this time, students of Fukui University of Technology participated in the production. An example to perform industrial development by building stones supplier cooperating with students was reported.

Keywords: Promote, Regional Industry, Stone Product

1. 研究の目的

茨城県の筑波山西部に広がる一帯では、良質な花崗岩の産地として知られていたが、バブル経済の崩壊や、中国からの輸入石材製品の輸入により地域伝統産業である石材業は深刻な危機に瀕している。2003年に石材業を担う若い有志によって「石匠の見世蔵」組合が結成された。筑波大学蓮見孝教授(現札幌市立大学)の指導のもと、「石匠の見世蔵」組合と筑波大学芸術学系の学生とのコラボレーションが始められ、学生と石工が協働しながら新たな石の魅力を発見し、灯籠を中心とした新しい石材製品の開発に取り組んできた¹⁾。今年度から福井工業大学デザイン学科の学生を加え新たな創造の場が形成されようとしている。本件では、福井工業大学学生の作品を中心に引き上げ、学生参加による産業振興の一例を報告したい。

2. 制作プロセス

アイデア展開

福井工業大学では、学生一人ひとり新しい石材製品のアイデアを出し合い学内コンペを行った。様々な空間を想定し、灯籠を主体としたアイデアスケッチを繰り返し、ニーズや新奇性を検討した。

真壁町におけるワークショップの開催

石切場や加工工場を見学し、石に触れながら加工についての説明を受けた後、学生それぞれのアイデアを石工にプレゼンテーションし制作する石工と学生とのマッチングが行われた。石工と

*デザイン学科 **筑波大学大学院人間総合科学研究科

の懇談を通して技術的な問題点、予想される市場の反応、施工のための工夫などが話し合われ、より現実的なデザインの場合を学生たちは体験することができた。石工からは突拍子もないアイデアだが新しい視点を得られたという意見も聞かれ、学生と石工とが協同しながらモノづくりが進んでゆく様子が見て取れた。〔図1〕



図1 ワークショップの様子

制作作業

マッチングが決まったデザインについては、発光部の仕組みと構造（灯籠の場合）、ディテールについて詳細に検討し図面化した。図面を基に学生と石工が連絡を取りながら各工房にて制作が行われた。

プレゼンテーション

真壁町夜祭りにて完成作品の展示が行われ〔図2〕、石材作品を前に各学生がコンセプトとプロセスをプレゼンテーションした。

石材の魅力発信と地域振興の取り組み

制作された作品は、「いばらきストーンフェスティバル」、真壁町で開かれる夜祭りやひな祭りでの展示や石と親しむワークショップによって地域振興の一助ともなっている。また図3に示すように、筑波大学学生を中心とするメンバーによりリーフレット²⁾が作成され、広報活動が行われた。



図2 展示会場の「坪井家」



図3 作成されたリーフレット

3. 制作された作品

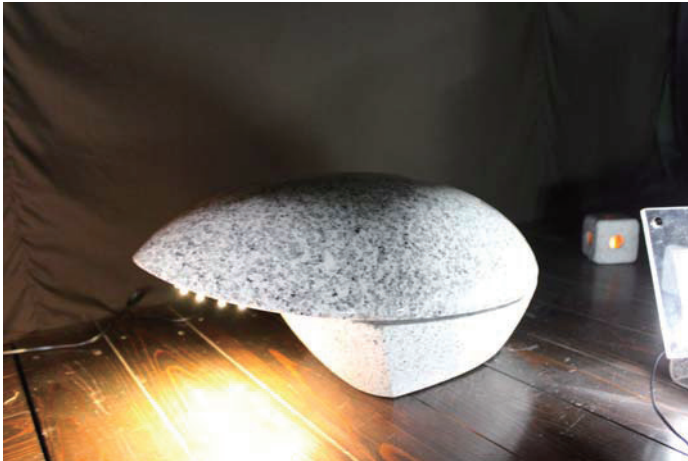
筑波大学 14 点、福井工業大学 7 点のデザインが採用され、真壁町夜祭りにて登録文化財「坪井家」を会場に完成した石材作品が展示された。旧来の日本庭園用の灯籠ではなく、モダンな空間に設置できる石灯籠や、線状の明りを灯す灯籠、玄関に置くことを想定し、傘立てやウェルカムボード、長靴干し等の機能が与えられた石灯籠などが提案された。[図4]



「光の化石」栃木邦貴



「Branchi Stone」桑原芳枝



「蛭科の石」 畠中勇樹



「魍魎魍魎」 石田千晃

図4 制作された作品の一部

4. おわりに

学生と石工の方々がコミュニケーションを図りながら新たな石の魅力を発見し石材製品のデザインに結びつけていくというプロセスを通して、業種や立場を超えた様々な人が結びつきコミュニティを形成しながら展開していく産業振興のあり方が見えてくる。「まちおこし」などの地域振興においても、日常生活の場とする住民には気づくことのない新しい魅力発見に優れたいわゆる「よそ者」の役割が重要といわれている³⁾。今回、福井からの「よそ者学生」が加わり、教育の場、創造の場としてのコミュニティに広がり可能性を見出すことができた。石工の方々にとっても、学生の無理難題を実現していくことで、技の鍛錬になると受け止めていただき、今年度も制作・展示を実現することができた。また学生間の交流も深めることができ、関係者の方々に感謝したい。今後、茨城と福井双方の特性が活かせるよう工夫したプログラムの構築を行い、さらなる発展へと繋げたい。

参考

- [1] 石匠の見世蔵組合, 石匠の見世蔵 2003-2012 10周年記念冊子, 2012.3
 - [2] 石匠の見世蔵 2012 リーフレット, 筑波大学五十嵐研究室・石匠の見世蔵組合, 2012.10
 - [3] 蓮見孝, 地域再生プロデュース - 参画型デザインングの実践と効果 -, 文真堂, 2009.4
- (平成 25 年 3 月 31 日受理)